

Richard Baldwin, The great convergence:  
information technology and the new  
globalization (書評)

著者	安藤 光代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	59
号	2
ページ	64-68
発行年	2018-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00050422">http://hdl.handle.net/2344/00050422</a>

Richard Baldwin,

*The Great Convergence:  
Information Technology  
and the New Globalization.*Cambridge and Massachusetts: The Belknap Press of  
Harvard University Press, 2016, 329pp.あん どう みつ よ  
安藤光代

## はじめに

急速に変化し、進展するグローバリゼーションに対する理解や考え方を正したい。本書の目的は、まさにここにある。誰もが耳にした記憶があると思われるアメリカの最近の話として、例えば、環太平洋パートナーシップ (TPP) 協定からの離脱、メキシコ国境の壁の構築や、おもな貿易赤字相手国のひとつであるメキシコからの輸入に対する 20 パーセントの関税賦課 (北米自由貿易協定 [NAFTA] があるにもかかわらず) などの提案といった、時代に逆行する極端な保護主義的な動きが挙げられる。TPP 協定は、高水準の自由化と幅広い分野での新たな国際ルールの構築を目指す 21 世紀型地域貿易協定としての期待も大きく、2016 年 2 月に署名されたものである。ところが、トランプ政権下でのアメリカの TPP 離脱を受けて、TPP は暗礁に乗り上げてしまった。物理的な国境の壁の実現可能性はともかく、このような保護主義的な発想は、いずれも「アメリカの産業の発展を促し、アメリカの労働者を守る」ためだという。果たして、現在のグローバル経済において、このような考え方は正しいだろうか。答えは、No である。「旧来のグローバリゼーション」の考え方に依拠すれば、単純に、国境に関税等の壁を作って国内の産業や雇用を守るという発想もありうる。しかし、すでに「新しいグローバリゼーション」の時代にある今、上記のような保護主義的な政策は、一時的には保護効果もあるかもしれない

が、かえって生産面でのマイナスの影響が大きくなり、守りたい国内の産業や労働者を苦しめることになると考えられる。

本書の著者は、「新しいグローバリゼーション」に対する正しい理解や考え方がなければ、誤った現状認識と表面的な大義名分のもと、誤った政策や方針が取られてしまうことを非常に危惧している。そこで本書は、読者に「新しいグローバリゼーション」の正しい認識をもってもらうべく、3つの要素に着目し、①グローバリゼーションをどのように理解すればいいのか、②グローバリゼーションの特性がどのように、またいかに急速に変わってきたのか (なぜ「旧来のグローバリゼーション」の考え方を「新しいグローバリゼーション」の世界に適用してはいけないのか)、そして、③今の先進国と発展途上国にとっての政策的含意はなにか、という点に重点を置いて、グローバリゼーションという壮大かつ重要なテーマと向き合っている。

このような目的のためだろう、本書にはテクニカルな経済理論や実証研究は一切ない。数式もなく、イラストが多用され、たくさんの事例も随所に盛り込まれている。そういう意味で、読者層を限定するものではない。研究者はもちろんのこと、一般の読者から政策立案者まで、多くの人にぜひ一読してもらい、今、我々が生きている世界を正しく理解するための一助にしてほしいと感じる本となっている。

## I 本書の構成と概要

本書は、はるか昔に遡り、人類 20 万年の歴史を振り返ることから始まる。グローバリゼーションが始まる前の特徴を理解してこそ、グローバリゼーションとはなにか、なにが変わったのかを正しく理解できる、という発想である。そして、モノ、アイデア、ヒトという 3つの要素の移動費用が技術革新によって順次軽減されていくという枠組みでグローバリゼーションを整理していく。具体的には、第1部(第1~3章)で、長い人類の歴史を4段階に分類し、第1段階および第2段階として蒸気船と鉄道の導入による輸送革命(1820年)以前の世界、第3段階として輸送革命以降1990年頃までの世界(「旧来のグローバリゼーション」=「第1のアンバンドリング」[地理的分離])、第4段階として1990年以降の世界

(「新しいグローバリゼーション」=「第2のアンバンドリング」)について、それぞれの特徴や概念を紹介している。第2部(第4・5章)では、さらに踏み込んで、新旧のグローバリゼーションがどのように、また、なぜ大きく違うのか、そして、本書のタイトルとも関連する疑問、なぜ「旧来のグローバリゼーション」下では南北間の相対的所得格差が拡大したのに対し、「新しいグローバリゼーション」下では相対的所得格差が急速に縮小した(収束した)のかを解説するとともに、第2のアンバンドリングの世界では、なにが新しいのかを明示的に示している。第3部(第6・7章)では、グローバリゼーションを理解する上で有用だと考えられるいくつかの経済学的な概念枠組みを紹介し、それらを踏まえて、新旧のグローバリゼーションの影響やその違いを議論している。最後に、第4部(第8・9章)では、現代の先進国と発展途上国にとっての政策的含意に触れ、第5部(第10章)で今後考えられうるグローバリゼーションの世界(「第3のアンバンドリング」)にも言及して、本書を締めくくっている。

本書の特徴は、①貿易費用、②コミュニケーション費用(ICT費用)、③face-to-face費用、という3つの費用(モノ、アイデア、ヒトという3つの要素の移動費用)に着目し、グローバリゼーション前の世界、旧来のグローバリゼーション=第1のアンバンドリングの世界、新しいグローバリゼーション=第2のアンバンドリングの世界を比較的わかりやすく区別し、新旧のグローバリゼーション(第1と第2のアンバンドリング)の違いをしっかりと理解させようという点にある。

グローバリゼーション前の世界では、これら3つの費用が高く、生産と消費は分離されない。次に、技術革新によって①貿易費用が低下すると、第1のアンバンドリングの世界へと移行する。第1のアンバンドリングとは、国境を越えて生産と消費が地理的に分離(アンバンドル)されることを意味する。19世紀末から蒸気船や鉄道などの大量輸送手段の普及に喚起された産業・業種単位の国際分業であり、そこでの貿易は、基本的に、原材料か完成品となる。その後、さらなる①貿易費用の低下に加え、②ICT費用も低下することで、第2のアンバンドリングの世界へと移行する。この第2のアンバンドリングは、IT革命を踏まえて生じてきたものであり、そこで

は国境を越えて生産工程・タスクが分離される。生産工程・タスク単位の国際分業が盛んになるにつれ、部品・中間財が貿易の大きな部分を占めるようになる。機械産業を中心に製造業分野での国際的な生産ネットワークが急速に形成されるのが、この時代である。そして、今後③face-to-face費用を引き下げようとする技術革新が進めば、例えば、テレプレゼンスやテレロボティクスが活用されるようになれば、第3のアンバンドリングの世界として、第2のアンバンドリングとは異なる世界が出現するという。

ここで、誰がなにを輸出するのかという問いを例に挙げ、いかに第1のアンバンドリングと第2のアンバンドリングの世界が異なるか、なぜ旧来のグローバリゼーションの論理を新しいグローバリゼーションの世界に当てはめてはいけないのか、考えてみたい。伝統的な貿易理論のモデルでは、比較優位のある産業の製品が生産・輸出される。第1のアンバンドリングの世界はこのような産業単位の比較優位の議論で説明できる部分も大きい。しかし、第2のアンバンドリングの世界では、生産工程・タスク単位の国際分業が可能となる。例えば高い生産技術や企業特殊資産をもつ先進国の企業が、安価な労働力を利用するために一部の生産工程・タスクを発展途上国に分散立地すれば、この途上国は、比較劣位にあるような産業の製品を輸出することになる。つまり、第1のアンバンドリングの世界で重要な、産業全体としての比較優位性や競争力をもちえないような発展途上国であっても、その産業の生産活動の一部を担うことができ、輸出ができ、急速に工業化を進めることが可能となる。その結果、第2のアンバンドリングの世界では、世界の製造業品生産に占める途上国(主に中国)の割合が上がる一方で、先進国の割合が下がって、(本書のタイトルのように)南北間の相対的な所得格差が急速に収束する、という現象が起きうる。

また、先のような国際分業の場合、生産される財の競争力は、(第1のアンバンドリングのような、先進国のアイデア〔生産技術やノウハウ〕ではなく)先進国のアイデアと途上国の安価な労働力の組み合わせによって決まってくる。この点が、第2のアンバンドリングの重要な特徴のひとつでもある。以下では、具体例を挙げて本書の議論を補足してみたい。先進国の企業が、技術開発(R&D)や高い生産技術

を要する部品・中間財の生産を国内で行い、途上国でそれらを用いて完成させた財を当該の先進国や他の国に輸出するというオペレーションはよくある国際分業の形態のひとつである。ここで関税を課すとどうなるか。部品・中間財であれば、最終品の価格が上昇し、(販売先がどこであれ)その財の価格競争力が落ちる。完成品であれば、その財を購入する消費者にとっての価格が上昇するため、(貿易赤字は外見上改善されるかもしれないが)需要が縮小する。いずれの場合にも、生産を縮小させざるをえなくなり、結果として、本来、守りたい国内のオペレーションや雇用を圧迫することになる。つまり、本書が主張するように、第1のアンバンドリングの世界では通用した論理を第2のアンバンドリングの世界に当てはめても、目的を達成することができないどころか、逆の効果をもたらさう。

第1のアンバンドリングから第2のアンバンドリングの世界に移行し、グローバリゼーションの影響はどう変わったのか。本書では、以下の4つの特徴を挙げている。すなわち、①より個人的に(競争力が産業単位ではなく、生産工程・タスク単位で決まるため、個々の企業や個人が受けもつ職種・タスクによって影響が異なる)、②より突然に(一部の生産工程・タスクの移管は比較的容易で突然の変化が起きやすい)、③より予見しづらく(生産工程の分割・配置方法は、各企業が有する企業特殊資産に委ねられる部分が大きく、どの生産工程が次にどこに行くかという予見が難しい)、④よりコントロールしづらく(ICTなどの技術革新は企業が自己の利益のために行うR&Dに依拠する面が大きく、関税削減などと違って、政府がコントロールしづらい)なったという4点である。そのため、第2のアンバンドリングの世界では、先進国にとっても途上国にとっても、様々な側面を考慮した政策を考える必要があると示唆されるとともに、それだけ政策立案が容易でなくなっているという。具体的な政策・施策については本書を見てほしい。

## II コメント

冒頭でも触れたように、本書には、精緻な経済理論や実証研究は一切ない。数式もなく、イラストが多用され、事例も随所に盛り込まれている。研究者

はもちろんのこと、一般の読者から政策立案者まで、幅広い層の読者にとって、今、我々が生きている世界を正しく理解するための一助になる、必読の書であるのは間違いない。逆にいえば、政策的議論のためには、本書で書かれていることがきちんと理解されているべきである。

本書で言及されているような第3のアンバンドリングの世界が、はたして本当にやってくるのかについては、評者にはよくわからない。しかし、モノ、アイデア、ヒトという3つの要素の移動費用を使った概念枠組みを提示したり、グローバリゼーションの影響としての4つの新しさ(より個人的に、より突然に、より予見しづらく、よりコントロールしづらく)を主張するなど、キーワードを使って、グローバリゼーションという大きな現象やその特徴をわかりやすく整理している点も、評価すべき、本書がもつ意義のひとつである。

おそらく、経済学をあまり知らなくても理解してもらいたいという思いや、一度説明してもなかなか理解してもらえないというこれまでの著者の経験が、本書のスタイルの根底にあるのだろう。そのためか、同じことの繰り返しが多く、既述の議論なのか新しい内容なのかわかりにくい部分や、テクニカルなことを避けようとするがあまり、逆に頭の整理がしづらと思う部分があるのも事実である。もしかしたら、読者にとっては少々忍耐強さが必要となるかもしれない。例えば、前節で評者が補足したように、(事例だけでなく)もう少し一般化したような具体例・考察もあれば、読者はより理解しやすくなるだろう。

また、本書のなかでテクニカルな経済理論や実証研究を極力展開しないとしても、関連のある実証研究の結果、とりわけ政策論に関連のある分析結果を、例として取り入れることはできるはずである。本書には、グローバリゼーションの歴史的变化がわかるような、興味深い図表はたくさん用いられている。その一方で、先進国企業が発展途上国に直接投資をして生産活動の一部を移したら先進国内では産業の空洞化が起きるのかなど、第2のアンバンドリングの世界における政策論につながるような実証研究には触れられていない。もちろん、あらゆる問題に対して十分な実証研究が行われているわけではないが、実証研究の引用は、本書の議論の裏づけや理解を深

める上で役に立つと考えられる。

例えば、木村・安藤 [2016] では、第2のアンバンドリング（国際的な生産ネットワーク）が政策論に与える影響として、先進国と企業活動のグローバル化、ショックへの耐性、新興国・発展途上国の開発戦略の変貌、経済統合について議論している。第2のアンバンドリングが先進国経済、とりわけ先進国内の雇用と経済活動にどのようなインパクトを与えるのかは、政策論上きわめて重要な問題である。一般論としては、産業・業種単位の国際分業よりも生産工程・タスク単位の国際分業のほうが、100パーセント国内かすべて海外かという極端な二者択一を迫られず、弾力的に国内雇用・オペレーションを残しうる。なぜなら、第2のアンバンドリングによって価格競争力を生み出すことで、需要・生産を拡大させ、国内の産業や雇用の拡大につなげることも可能であるし、国内に海外と補完的なオペレーションを残すことも可能となるからである。しかし本当に空洞化を回避あるいは遅延させることができるのかは、実証研究で確認すべき問題であり、だからこそ、実証研究の例も取り上げ、企業活動のグローバル化の議論もほしいところである [例えば Ando and Kimura 2015]。

ショックへの耐性という側面も、本書では触れられていない。国際的な生産ネットワークの特性として、需要面であれ、供給面であれ、ショックに直面すると、生産ネットワーク自体が（地理的に広い範囲に展開されているほど）ショックを伝達するチャンネルとなってしまう（リスクを有する）ことは否定できない。しかし、興味深いことに、生産ネットワーク内の取引はその他の取引よりも途切れにくく、またいったん途切れても回復しやすいという実証結果がある [例えば Obashi 2011; Ando and Kimura 2012; 木村ほか 2016]。つまり、国際的な生産ネットワークは、ショックに直面した際、確かに一時的な負の影響はあるとしても、むしろ安定的だと示唆される。実際、世界金融危機発生直後、すでに国際的な生産ネットワークに参加している東アジアの国からは、参加しているから負の影響を受けているのでは（参加しないほうがよかったのでは）ないか、まだ参加していない国からは、参加しないほうがいいのではないかという質問を投げかけられた。東アジアの国々の著しい経済成長や近年のベトナムの躍進

の背景には、間違いなく、国際的な生産ネットワークの存在があり、本書でも発展途上国にとって国際的な生産ネットワークへの参加が重要だと述べられている。途上国の開発戦略を考えるためには、このような生産ネットワークの特性を理解しておくことも重要である。

他にも、本書で触れられていないものとして、国際的な生産ネットワークのなかでの取引のタイプ（国内外の企業内取引・企業間取引）、東アジア、北米、ヨーロッパの国際的な生産ネットワークの特徴の違い、産業による生産ネットワークの特徴の違い（機械産業のなかでも電気電子産業と自動車産業の違い）などが挙げられる [Ando 2006; Ando and Kimura 2013; 2014; Kimura and Ando 2005 など]。本書で数多く取り上げられている一企業の事例だけでなく、もう少し集計されたレベルでの実証的証拠にもとづく、このような議論などにも言及すれば、読者は第2のアンバンドリングの実態をより一層理解できるのではないだろうか。

最後に、本書は、グローバリゼーションという大きな現象を極力わかりやすくシンプルな形で整理した力作であり、評者自身、グローバリゼーションの考え方を再度整理するのに非常に役に立った。と同時に、今後これまで以上に予測しないような速度や方向性に進んでいく可能性のあるグローバル経済において、例えば開発戦略としてのシナリオ等、政策パッケージの構築や政策提言の難しさを改めて実感させられた。

## 文献リスト

〈日本語文献〉

木村福成・安藤光代 2016. 「多国籍企業が生産ネットワーク——新しい形の国際分業の諸相と実態——」 木村福成・椋寛編『国際経済学のフロンティア——グローバリゼーションの拡大と対外経済政策——』東京大学出版会。

木村福成・大久保敏弘・安藤光代・松浦寿幸・早川和伸 2016. 『東アジア生産ネットワークと経済統合』慶應義塾大学出版会。

〈英語文献〉

Ando, Mitsuyo 2006. "Fragmentation and Vertical Intra-

- industry Trade in East Asia.” *The North American Journal of Economics and Finance* 17(3): 257-281.
- Ando, Mitsuyo and Fukunari Kimura 2012. “How Did the Japanese Exports Respond to Two Crises in the International Production Networks? The Global Financial Crisis and the Great East Japan Earthquake.” *Asian Economic Journal* 26(3): 261-287.
- 2013. “Production Linkage of Asia and Europe via Central and Eastern Europe.” *Journal of Economic Integration* 28(2): 204-240.
- 2014. “Evolution of Machinery Production Networks: Linkage of North America with East Asia.” *Asian Economic Papers* 13(3):121-160.
- 2015. “Globalization and Domestic Operations: Applying the JC/JD Method to Japanese Manufacturing Firms.” *Asian Economic Papers* 14(2): 1-35.
- Kimura, Fukunari and Mitsuyo Ando 2005. “Two-dimensional Fragmentation in East Asia: Conceptual Framework and Empirics.” *International Review of Economics and Finance* 14(3): 317-348.
- Obashi, Ayako 2011. “Resiliency of Production Networks in Asia: Evidence from the Asian Crisis.” In *Trade-led Growth: A Sound Strategy for Asia*. eds. Simon J. Evenett, Mia Mikic and Ravi Ratnayake. New York: United Nations Publication.

(慶應義塾大学商学部教授)